

教育社会学研究第62集（1998）

韓国における高等教育機会の メリトクラシー構造

—男女の大学タイプ・ランク別進学機会を中心に—

キム・ミラン（金 美蘭）

1. 問題設定

本稿の目的は高等教育のマス化状況にある韓国を取り上げ、教育機会の構造を実証的に分析することにある。

韓国では、1980年代を通して高等教育拡大政策によって高等教育への進学機会が著しく拡大し、高等教育の大衆化が実現した。その背後には塾や家庭教師などの学校外の学習活動である「過熱課外」への経済負担によって生じる階層間の進学機会の不平等をなくそうとする意図が大きく作用した。課外費の支出で形成される階層間の進学機会不平等を課外禁止と高等教育の門戸開放により解決しようとしたのである（チョン・テス 1993）。その結果、同一年齢の高等教育就学率は1994年現在49.3%と2人に1人が短大や大学など何らかの高等教育機関に進学している。女子の高等教育就学率が34.4%であることを考えると、男子だけの就学率は実に64.2%にも達しているのである（韓国教育開発院 1994）。

あまりにも急激な高学歴化による学歴インフレーション、高学歴者の失業問題など学歴の効用が著しく低下している現在も、92.9%の親が自分の子どもに大学の教育を期待しており、博士学位の取得まで希望している親の割合も27.7%にのぼっている（韓国教育開発院 1993）。このような韓国の「教育熱」と呼ばれる高い高学歴志向の背景には、「一流大学を卒業することで有利になるのは何より就職である」など、高等教育が個人の社会経済的地位の向上に役立つという考えが根強く存在している（イ・ミナ、ベ・ゾングン 1991）。

このようにだれもが社会的地位獲得のために高学歴を望むという韓国の状況は、社会階層などの「属性」ではなく、知能に努力を加えた「メリット」をもった者が選別されて地位達成に成功するというメリットクラシーの汎化にほかならない。実際に、「7.30教育措置」という教育機会開放政策が打ち出された1981年を境に、能力があるにもかかわらず経済的理由によって大学進学ができないという階層不平等意識が薄れてきた¹¹⁾。高等教育の大衆化によって、少なくとも意識の面では社会的地位達成に必要な学歴の取得には経済的な階層地位や出身地域などの社会階層よりも能力や努力などの業績が重要であるというメリットクラシーの大衆化が実現しているといえる。

しかし、高等教育の大衆化と、職業地位獲得を通じた社会的地位達成に業績による学歴が重要な指標であるという人びとの認識から、その社会がメリットクラティックな社会であると考えるのは誤りである。というのも、メリットクラシーとは選抜の前の平等性＝機会の平等によって結果の公正性が獲得できる社会構造を指す概念だからである。教育機会の不平等を不問にして学歴・学校歴といった教育達成の社会的機能を語ることは、ブルデューも指摘したように（ブルデュー & パスロン訳書 1991）、学校制度が能力に基づくメリットクラティックな選抜を通じて社会階層構造の再生産の過程を隠蔽し、不平等を正当化する装置になりうるという事実を看過するものである。メリットの帰結である学歴によって社会地位が決まるという「学歴社会」として広く知られている日本においても、教育機会が量的に大きく拡大したにもかかわらず、教育達成に及ぼす出身階層の影響が大きいことが指摘されている（藤田 1979, 直井 1987, 尾島 1990）。

近年の急速な高等教育の大衆化とともに人びとの意識にメリットクラシー信仰が拡大している韓国において教育と階層はいかなる関係で結びついているのだろうか。本稿ではこのような問題意識に基づき、出身階層と教育機会の関係に着目して、教育の機会が拡大しているなかで機会の不平等がどのような形で残存しているのか、あるいは存在しないのかといった問題をソウルにおける大学生調査を手がかりに実証的に明らかにする。

ここで対象としている韓国の学歴と階層の関係から、学校が学業成績という能力＝業績を媒介として社会の階層構造に果たしてきた役割を探ることは比較社会的にみて、たいへん興味深い問題である。同じ儒教文化圏にあり、激しい受験競争や社会全般に広くゆきわたっている学歴主義慣行で知られている韓国を取り上げることは、日本の学歴や階層研究に有効な比較の視点を提供するものとして意義深いと考えられるのである。

2. 先行研究の検討と分析課題・仮説

韓国で学歴に関する問題が研究テーマとして考えられるようになったのは高学歴化が進行してきた1980年代の半ばからである（ソン・ヨンギョン 1993）。そのため、「学歴社会としての韓国の教育矛盾がどのように現れているかについての具体的な分析が欠けている」（キム・ブテ 1995, 318頁）との指摘もあるように、実証分析についての研究蓄積ははじまったばかりといえる。その数少ない研究のなかで、学歴と階層問題に取り組んでいるキム・ヨンファの研究を取り上げ、その成果と限界を示すことで本稿の課題を明らかにする。

キム・ヨンファ（1990）は教育達成に及ぼす出身家庭の背景や出身地域などの帰属的要因の影響が産業化によってどのように変化してきたかを時系列に分析している。キムは韓国のセンサス調査に基づき、農業に加え、「中上階級」「新中産階級」「旧中間階級」「勤労階級」「都市下流階級」の5つの階級を設定し¹²⁾、他の条件が同一である場合のそれぞれの階層の大学進学機会の確率を算出している〈資料1〉。この〈資料1〉の表から、キムは父親の職業に代表される出身階層が子どもの教育機会獲得に及ぼす影響が続いていることを明らかにし、高等教育機会の拡大は「構造化された不平等」を改善するのに何の役にも立っていないという結論に達している。

〈資料1〉 出身階級別・出生集団別高等学校卒業者の大学進学確率

出生集団 出身階級	1948-50	1953-55	1958-60	1963-65
中上階級	0.119	0.162	0.159	0.234
新中産階級	0.053	0.062	0.079	0.134
旧中間階級	0.064	0.056	0.064	0.134
勤労階級	0.043	0.048	0.053	0.087
都市下流階級	0.041	0.057	0.055	0.083
農業従事者	0.054	0.064	0.068	0.114

注：大学進学確率とは父親の教育水準が0年（無学）で、5年前に農村に居住した男子を基準としたロジット分析である。例えば、1948-50年出生集団中、中上階級出身者の値が0.119で、都市下流階級の値が0.041であることが示されている。

これは父親が無学で5年前に農村に住んでいた男子を仮定した場合に、彼らの出身階層が中上階級であったとしたら、大学に進学する確率が11.9%になり、同じ条件のもとで都市下流階級出身者の場合は大学に進学する確率が4.1%になるということを意味する。

出典：キム・ヨンファ 1990

「高等教育拡大の結果：高等教育機会獲得に及ぼす出身階層の影響推移（1967-1984）」『教育学研究』第28巻3号、教育研究所編、77頁。

さらに、その後の研究でも、キムは教育熱の様相を階層別に比較し、全般的に高等教育を望む教育期待は高いが、その期待する高等教育のタイプには階層間で違いがあることを明らかにした（キム・ヨンファ 1992）。つまり、父親の職業階層が労働者階級、都市下流階級、農業従事者である場合と母親の学歴が低い階層では専門大学（2年制の短期大学）を選好する傾向があり、父親の職業階層が高く、母親の学歴が高い階層では4年制大学、さらには大学院教育を期待しているのである。

〈資料2〉 子どもに受けさせたい教育程度

（単位：％）

	専門大学卒	大学卒	修士以上
父親の学歴			
無学・小学卒	21.9	46.1	11.0
中卒	20.3	55.2	13.1
高卒	15.6	58.6	20.7
短大卒	7.2	58.0	30.4
大卒以上	3.0	47.8	47.8
計	15.7	52.6	21.6
母親の学歴			
無学・小学卒	21.4	48.0	11.8
中卒	17.5	59.9	15.8
高卒	9.1	58.5	28.9
短大卒	7.7	46.2	43.6
大卒以上	4.0	32.7	60.4
計	15.8	52.3	21.4
社会階級			
中上階級	9.0	44.1	42.3
新中産階級	13.5	56.2	21.9
旧中間階級	8.5	60.9	24.6
勤労階級	24.2	53.2	13.7
都市下流階級	23.0	45.9	17.6
農業従事者	24.7	44.8	11.3
計	15.2	51.9	23.5

すべて $P < 0.01$ で有意。

出典：キム・ヨンファ 1992

「親の教育熱：社会階層間比較を中心に」『教育学研究』第30巻4号、教育研究所編、179頁。

これらの研究は急激な高等教育の拡張によってだれもが進学できるようにみえた1980年代においても、階層による進学機会の不平等がつづいたこと、さらには階層による教育期待という学歴に対する意識の違いを媒介として親の学歴の高い子どもは高い学歴を取得するようになるという点を示唆している。しかし、キムの研究は次の3つの点において不十分であるといわなければならない。

韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造

第1に、親の学歴階層が大学進学機会に主要な指標であることについて言及しながら、その実証的分析には踏み込んでいないのである。全般的な所得水準の向上によって、親の経済的なカテゴリーとしての階層よりも、「親の学歴」という文化階層の重要性が増していることを考えれば、親の学歴階層が子どもの進学機会に及ぼす影響についての具体的な分析の必要があるのである。

第2に、大学の序列化の進行に伴う大学内部での階層問題については明らかにしていない。4年制の大学か、2年制の専門大学かといった学校タイプだけではなく、一流大学か、それ以外の大学かといった学校ランクによって就業機会などのライフチャンスが規定される韓国の現状を考えると（チェ・ヨンピョ 1989, カン・スノオン 1990・1994）、学校段階はもちろん、成績という学校的能力によって序列化されている大学内部の階層的要因についての分析が重要になってくるのである。

そして第3に、キムの研究では学歴取得における教育機会の男女差をまったく無視している。日本のように「男の子は大学、女の子は短大」という性別と高等教育機関とのはっきりした対応関係（天野正子 1986, Brinton 1993）はみられないにしても、韓国でも娘には常に息子より一段低い教育を期待する¹³⁾。進学機会を規定する親の教育期待という教育アスピレーションそれ自体の男女の違いが性別による教育機会の階層構造にも反映されると考えられる。というのも、進学率において男子の半分にしか満たない女子の教育機会には、性役割に対する社会的期待への対応という女性特有の要因がはたらいているからである。この点を考えると教育機会と階層の関係を男女別にわけて考察する必要があるのである。

これら先行研究の成果と限界をふまえ、本稿では具体的に次の問題について分析を行なう。親の職業・学歴といった学生の出身階層はどのような分布を示しているのか。さらに成績によって分化されている大学ランク間に階層の違いがみられるかどうか。これら大学タイプやランクにおける教育機会の階層化を男女別にみると、そこにはどのような違いが現われるだろうか。違いがあるとすれば、その違いはどのようなメカニズムによるものであろうか。

以下では、質問紙調査の回答を分析し、次の3つの仮説を検証することで、こうした問いに解答を与えていくことにする。

〈仮説1〉：教育の大衆化にもかかわらず、教育機会には依然として親の職業・学歴などの社会階層による不平等が存在する。

〈仮説2〉：学業成績＝業績という個人の能力によって序列化される大学タイプやランク別の進学機会にも社会階層要因が作用する。

〈仮説3〉：男女別に高等教育タイプやランク別の進学機会への階層影響力は男子より女子において強く現われる。

3. データ

ここで用いるデータは「大学生活と将来設計に関する調査」として、筆者がソウル市内の8校の大学・短大で1995年11-12月に実施した質問紙調査から得られたものである。大学タイプやランクによる教育機会の階層化をみるため、対象校は一般に「一流大学」「二流大学」「三流大学」などとランクづけられている大学をそれぞれ2校、専門大学と呼ばれる短期大学1校、有名女子大学1校をサンプルとして選んだ⁽⁴⁾。一流大学のうち1校が受験難易度随一とされる国立大学である他はすべて私立大学である。また、韓国の女子高等教育人口の5分の1が女子大学に在学していることから韓国の代表的な女子大学を加えた。質問紙はそれぞれの大学の「教職科目」の授業で配布され、その場で回収したものである。有効サンプル数は992で、回収率は83%であった。

表1 調査対象者の基本的属性

(単位：%)

	全体	学 年				学 部				大 学 別*				
		1年	2年	3年	4年	人文系	自然科学系	芸術系	家政系	大学5	大学4	大学3	大学2	短大1
女子	59.9	18.5	54.0	15.4	12.1	59.8	10.8	10.2	19.3	24.2	35.2	12.3	9.1	18.9
男子	40.1	53.3	24.2	11.9	10.6	32.7	59.9	6.2	1.2	30.4	—	5.0	46.0	18.6

N=992 (女子：594, 男子：398)

*注：ランクの最も高い大学が5, 最も低い大学が1, という順位である。

4. 高等教育進学機会の階層差

社会的選別によって評価される教育能力の中身は上層階層において取得される文化に近いことから、高等教育の拡大が実現したとしても階層による学歴取得の違いはなくなるという(ブルデュー・パスロン訳書 1991)。ユニバーサル段階の高等教育大衆化を迎えつつある韓国においても、階層による教育機会の不平等がみられるだろうか。〈仮説1〉として設定したこの問題について考察する。親の職業と学歴という2つの階層指標を使って教育機会の階層差についての検証を試みよう。

(1) 職業階層による進学機会の違い

まず、だれが大学に進学しているかについてみてみよう。

職業階層の分布をみると、「官公庁・一般企業の管理職」「経営職」「大学教授・研究

韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造

員」「医師・法曹関係」「会計士・薬剤師などの専門職」など専門・管理職としてくられる上層ノンマニュアルと呼ばれる階層の出身者の割合が高いことが表2から確認できる。

表2 父親の職業分布

(単位: % (人))

大分類	全 体	小 分 類	女 子	男 子
高位管理職	16.9 (161)	官公庁・一般企業の管理職	16.1 (94)	18.1 (67)
経営職	18.2 (173)	会社経営・事業家	20.7 (120)	14.3 (53)
専門職	10.2 (97)	大学教授・研究所研究員	3.3 (19)	0.8 (3)
		音楽家・作家・芸術家	0.3 (2)	0.3 (1)
		医者・法曹関係	1.7 (10)	0.5 (2)
		編集者・記者・放送などマスコミ関係	0.7 (4)	—
		会計士・薬剤師などの専門職	1.7 (10)	1.1 (4)
		教師	5.7 (33)	2.4 (9)
一般職	21.7 (206)	官公庁・一般企業の一般事務職	13.6 (79)	8.6 (32)
		販売・サービス職	9.0 (52)	11.6 (43)
自営業	13.9 (132)	商店などの自営業	13.8 (80)	14.0 (52)
農林・生産職	13.1 (124)	技能工・単純生産職	5.9 (34)	10.2 (38)
		農林漁業	3.4 (20)	8.6 (32)
無職	1.1 (10)		0.3 (2)	2.2 (8)
不在	5 (0.5)		0.3 (2)	0.8 (3)
死亡	4.5 (43)		3.3 (19)	6.5 (24)
N	951		580	371

表3 調査対象者の出身階層と選抜度

(単位: %)

父の職業階層	今回調査対象者(A)*	1996年度労働力調査(B)**	選抜度(A/B)***
高位管理職/専門職	48.0	11.5	4.17
技術工・準専門職 事務職/サービス・販売職	37.6	30.1	1.25
機能職/装置・機会組立職 単純労務職/農林漁業職	14.4	58.3	0.25

* 不在・死亡と無職を除いたもの。

** 45-59歳における百分比。韓国統計庁『経済活動人口年報』1997年より作成。

高位管理職/専門職=官公庁・企業の管理職、大学教授・研究職、作家・芸術家、会社経営者・事業家
 医師・法曹関係、編集者・記者などマスコミ関係、会計士、薬剤師の専門職、教師
 技術工・準専門職/事務職・サービス・販売職=自営業、官公庁・企業の一般事務職、サービス・販売職
 機能職/装置・機械組立職/単純労務職/農林漁業職=機能工・生産職、農林漁業

*** 各カテゴリーにおける標本の母数に対する構成比の比率を示したもの。

表2から上層ノンマニュアルの優位を示すために、韓国の『経済活動人口年報』から親の年齢層に該当する男性の職業構成化を使って選抜度を出してみた(表3)。ここで用いる選抜度とは、階層ごとにみたこれら大学進学者の構成比を韓国全体の職業構成の中でその階層の占める割合で割った数字である。この結果からわかるように、上層ノンマニュアルの選抜度は4.17で、どの階層からも均等に大学への進学チャンスが開かれているとした場合よりも4倍以上、上層ノンマニュアル層が有利であることを示している。

(2) 学歴階層による進学機会の違い

次に、最近文化資本の指標として重要度を増している学歴階層についてみることにしたい。表4により親の学歴階層についてみると、全体的に両親の学歴がきわめて高いことがわかる。全体で短大・大学・大学院卒という高学歴の母親をもつ学生の比率は25.0%で、同じく高学歴の父親をもつ学生の割合は44.6%にものぼる。男女別高等教育進学率がわかるもっとも古いデータである1970年の高等教育進学率をみると男子では8.8%、女子では4.5%である(文教統計年報 1971)。このデータから学歴階層の選抜度を考えると、親が高学歴である場合には5倍以上も進学機会が高くなるということになる。すなわち、本調査対象者の親の世代が1970年以前に大学を出ていることを勘案すれば大学への進学機会がきわめて高い学歴階層によって占められていることが推測できるのである。

以上、大学進学者の親の職業と学歴階層の分布から、平等に開かれているはずの高等教育機関の進学機会には、親の職業という経済階層のみならず、学歴という文化的階層との強い相関があることが明らかになった。「教育の大衆化にもかかわらず、教育機会には依然として社会階層による不平等が存在する」という〈仮説1〉が確認できたと言える。

表4 親の学歴分布

(単位: % (人数))

		無学・小学卒	中学卒	高 卒	短大・大卒	大学院卒
父親の学歴	全 体	8.4 (78)	12.0 (111)	32.5 (35.0)	33.6 (312)	11.0 (102)
	女 子	5.2 (30)	8.5 (49)	32.8 (190)	38.5 (223)	15.0 (87)
	男 子	12.6 (44)	17.8 (62)	38.7 (135)	25.5 (89)	4.3 (15)
母親の学歴	全 体	16.3 (151)	18.4 (171)	40.4 (376)	23.3 (217)	1.7 (16)
	女 子	10.2 (59)	15.5 (90)	43.2 (250)	29.2 (169)	1.9 (11)
	男 子	26.1 (92)	23.0 (81)	35.8 (126)	13.6 (48)	1.4 (5)

注: すべて $P < 0.01$ 水準で有意である。

韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造

5. 大学タイプによる階層差

次に、「学業成績＝業績という個人の能力によって序列化される大学タイプやランク別の進学機会にも社会階層要因が作用する」という〈仮説2〉の検証に移る。

韓国社会は高卒、大卒といったタテの学歴だけではなく、血縁・地縁とともにヨコの学歴である学縁とよばれる学閥がものをいう社会である（キム・ヨンスク 1991, キム・ソノップ 1993）。つまり「どの大学を出たか」という学校歴が重視されるのである。大学へ進学するか否か、さらには一流大学に入るか否かという学歴・学校歴の獲得には学業成績の影響が大きいと考えられる。しかし、階級の文化資本が教育達成＝学力に有利なコードとなって学歴資本に変換され、その学歴資本が社会地位に変換されることによって経済的利益を生み出すという階層の文化的再生産メカニズムを考えると、「どこの大学か」という大学タイプやランク別の進学機会にも階層の影響が強く作用することが予想される。学業成績によって決められている一流大学進学機会にも階層差が生じているかどうか。この点について分析するため、大学タイプ・ランクと親の階層との関連をまとめてみた。

表5 大学ランク別親の階層

(単位：％(人数))

	1	2	3	4	5	計
父親の学歴*						
高等教育卒	23.4	28.4	57.6	65.9	50.2	44.7 (415)
中等教育卒	49.1	46.8	28.3	24.5	26.9	35.0 (325)
無学・小学卒	27.4	24.9	14.1	9.6	22.9	20.3 (189)
	$P < 0.01, \chi^2 = 111.2568$					
母親の学歴*						
高等教育卒	7.3	13.9	33.7	42.8	28.3	25.0 (233)
中等教育卒	43.5	44.3	42.4	39.4	35.4	40.5 (377)
無学・小学卒	49.2	41.8	23.9	17.8	36.2	34.5 (322)
	$P < 0.01, \chi^2 = 107.2375$					
親の職業**						
専門・管理職	27.6	36.8	50.0	60.0	51.0	45.3 (431)
一般職	45.9	39.2	39.1	29.5	28.8	35.5 (338)
農業・生産職	26.5	24.1	10.9	10.5	20.2	19.2 (183)
	$P < 0.01, \chi^2 = 62.2356$					

注*：「中等教育卒」は中卒・高卒の場合、「高等教育卒」は短大・大学・大学院卒の場合。

注**：「専門・管理職」は高位管理職・経営職・専門職の場合。

「一般職」は一般職、自営業の場合。

「農業・生産職」は農業・生産職の場合。

表5で親の階層を大学ランク別にみると、授業料の安い国立大学が含まれるランクのもっとも高い5の大学と、男子よりも階層の高い女子のみで構成されているランク4の女子大学に不連続がみられるが、概ね大学ランクが高いほど、親の学歴が高く、親の職業が専門・管理職である者が多いという傾向がみられる。すなわち、学力を媒介として、階層と社会的に評価される有利な大学への進学との強い相関がみられるのである。

以上の分析から、〈仮説2〉のとおり、一流大学への進学機会にも階層差があり、上層階層の子弟ほど有利であることが認められる。つまり、拡大した高等教育の機会が階層ごとに異なるタイプの機会拡大であることを確認できたといえる。東大をはじめとする「有力大学」への進学機会が上層ノンマニュアル層の子弟の「寡占」状態にあるという日本（荻谷 1995, 97-98頁）と同様、大学に進学した者だけを取り出した場合でも親の学歴や職業によってどのようなタイプ・ランクの高等教育機関に進学しているかが違ってくるのである。すなわち、入学に必要とされる学力＝成績の差異を媒介として、高等教育機関の序列と出身階層との対応関係が出来上がっていると考えられるのであり、進学率の上昇によってもたらされた高等教育機会の拡大は教育機関のタイプ・ランクにまで分け入って見た場合、階層差を温存したまま拡張したということがわかるのである。

6. 男女別にみた大学進学機会

これまでは教育機会と階層の関係を全体的にみてきた。しかし、女子の進学機会は親の教育期待などの社会的ニーズによって、進学率の面から男子に追いついていないので、男子のそれとは異なる様相を示すものと考えられる。つまり、女子の大学タイプ・ランク別進学は家庭の経済的・文化的階層によって、より大きく左右されるのではないだろうか。そこで、次に〈仮説3〉を検証するため男女別にみた進学機会への階層要因の影響を、ロジット分析を使って考察する。

(1) ロジット分析でみる進学機会における階層の規定力

4年制大学か、短大か、さらには一流大学と呼ばれるランク上位の大学か、そうではない大学か、といった進学パターンにおける出身階層の違いを男女別にみてみよう。ここで使うロジット分析とは、さまざまな説明変数がそれぞれ独自に被説明変数に及ぼす影響を捉えることができる方法である。分析に用いる説明変数とその数量化の手続きについては表6に示すとおりである。

韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造

大学のタイプとしては短大か、大学か、また大学ランクとしては一流大学か、それ以外の大学かを被説明変数とする。説明変数には階層の指標としての親の職業、暮らし向きという経済的要因に加えて親の学歴を用いる。さらに、ここではソウル出身か、地方出身かという出身地域変数を導入することにした。というのも、調査対象とした大学はすべてソウル所在の大学であるため、地方出身者の場合は下宿費などの経済的負担が大きいことや、進学に関する情報などの不足によってソウル出身者とは進学機会に差があると考えられるからである。これらの説明変数はいずれも学生の自己申告によるものである。

表 6 分析に用いる説明変数

<従属変数>	
4年制大学進学	4年制大学の場合……1, 短大の場合……0
一流大学進学	ランクの高い大学5, 4の大学……1, それ以外の大学……0
<独立変数>	
父親の職業	専門・管理職……1, それ以外の職業……0
親の学歴	短大・大学・大学院卒……1, それ以外の学歴……0
出身地域	自宅で通学している場合……1, それ以外の場合……0
経済階層	暮らし向きがとても豊かである……1, それ以外の場合……0

さて、短大か、4年制大学か、または一流大学か、それ以外の大学かといった高等教育機関のタイプ・ランクによる進学機会を規定する階層要因についてのロジット分析の結果を表7によって、男女別にみることにしよう。

はじめに女子についてみると、親の職業や経済階層などの要因をコントロールしても両親が高等教育卒の場合には、女子の一流大学進学に有意な正の効果をもつことがわかる。このように学歴階層要因が大きな影響力をもつのは一流大学の進学機会だけではない。短大ではなく4年制の大学へという大学進学機会にも出身階層要因が大きな影響を及ぼすのである。それに対して、自宅から通っているソウルやその近郊出身であることは、ソウル所在の一流大学進学に.1650、短大より4年制大学進学に.1669ほど負の影響力を及ぼしているという結果になっている。

同じ手続きで男子の進学タイプに対する階層の影響力を算出してみると、不思議なことに女子とは違って階層要因の影響がほとんどみられない。親の経済的・文化的階層要因が4年制大学への進学、および一流大学への進学に及ぼす影響力は現れないのである。唯一、統計的に有意なのは、ソウル出身であることが一流大学進学にマイナス要因としてはたらいっていることである。この点においては女子の分析結果と共通している。

表7 大学・一流大学進学を規定する階層要因分析

(女子)

	一流大学進学		4年制大学進学	
	B	R	B	R
専門・管理職	.2852	—	.4379	.0331
高等教育（父親）	.7255	.1049**	.9513	.1302**
高等教育（母親）	.7176	.0839*	1.5102	.1190**
経済階層上位	-.2282	—	.5620	—
ソウル出身	-1.2541	-.1650**	-1.7484	-.1669**
Goodness of Fit	564.453		567.515	
χ^2	72.451**		96.536**	
自由度	5		5	

(男子)

	一流大学進学		4年制大学進学	
	B	R	B	R
専門・管理職	.1146	—	-.0895	—
高等教育（父親）	.8059	.0826	.6454	—
高等教育（母親）	-.2077	—	.0319	—
経済階層上位	-.0591	—	-.0256	—
ソウル出身	-1.4909	-.2565**	-1.3739	-.1627**
Goodness of Fit	327.783		324.223	
χ^2	33.685**		14.924**	
自由度	5		5	

*は $P < 0.05$ 水準で有意, **は $P < 0.01$ 水準で有意。

これらの統計データはすでに大学進学を果たしている調査対象者から得られたものであるにもかかわらず、女子では短大よりも大学、そして学力ランクの高い一流大学への進学チャンスが親の階層要因によって大きく左右されるということがわかった。すなわち、女子の場合は親の社会階層が高いと短大より大学、さらには一流大学への進学チャンスが大きくなることを意味するのである。このように女子は出身階層の強い影響によって進学する高等教育機関のタイプ・ランクが異なっている。ところが、女子の場合とは対照的に、男子の有利な大学進学には階層的影響がほとんどみよれないのである。

それでは、なぜ男子の大学タイプ・ランク別進学機会に階層の要因が大きな影響力をもたないのか。以上でみてきたように、男子の場合には階層よりも「メリット」要因によって大学タイプ・ランク別進学機会が大きく左右されるという可能性がある一方、女子の場合はどの大学進学においても階層の影響を強く受けている。この知見は男子と女子とでは異なる進学のメカニズムが働いていることを示唆している。そこ

韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造

で、男女ともソウル出身であることが進学機会に負の影響を及ぼすという先の結果を手がかりに、出身地域と階層との関係を中心に進学機会の男女差を検証する。

(2) 地方出身者の進学機会からみた男女別進学機会の規定要因

常識的な見方に従えば、地方出身者は学費に加えて、下宿費など高等教育にかかる費用の違いなどによって同じ階層のソウル出身よりもソウル所在の大学に進学する上で不利であると考えられる(カン・ムソップ 1990, ハン・マンギル 1991)。ところが、上述の分析はこの常識に反し、むしろ地方出身であることが一流大学進学機会に有利にはたらくというのである。

この結果をどう解釈すればよいのだろうか。先にみた男子の一流大学への進学機会には階層よりもメリット要因が強く影響されうるという知見は、地方・ソウルという出身地域の違いを媒介に成立するのではないだろうか。もしも、地方の優秀な人材が出身階層と関係なく、ソウルに集中している一流大学に進学しているとすれば、一流大学進学機会における階層要因の影響は相殺されるだろう。すなわち、階層要因の影響をあまり受けない地方出身者が一流大学へたくさん進むことになると、一流大学への進学機会を左右する重要な変数は、社会的出自より能力・努力＝メリットであると結論づけることができるのである。以下では、このような出身地域差に注目して男女の一流大学進学に及ぼす階層の影響について考察を進めていくことにする

A 一流大学における出身地域の違い

ここでは一流大学だけに注目して分析を進めていく¹⁵⁾。表8は出身地域・階層・大

表8 一流大学における出身地域の男女別階層差

		ソウル出身	地方出身	カイ二乗 (χ^2)	自由度
専門・管理職 ¹⁾	男子	56.5	25.9	25.8358**	2
	女子	59.1	59.8	3.1174*	2
高等教育(父親) ²⁾	男子	50.8	17.6	15.9315**	2
	女子	67.8	53.8	7.4335*	2
高等教育(母親) ³⁾	男子	24.6	11.5	13.8599**	2
	女子	41.9	35.2	6.1819*	2
経済階層上位 ⁴⁾	男子	59.3	33.4	13.1981**	3
	女子	75.0	60.0	9.8196*	3

* $P < 0.05$, ** $P < 0.01$ 水準で有意。

注1) 「専門・管理職」「一般職」「農業・生産職」の三段階における専門・管理職の割合。

注2), 3) 「高等教育レベル」「中等教育レベル」「無学・小学レベル」の三段階における高等教育卒の割合。

注4) 「上」「中の上」「中の下」「下」の四段階における「上」「中の上」の割合。

学タイプ別（一流大学とそれ以外の大学）の三重クロスである。この表から、一流大学における出身地域別の階層差を男女別にみてみよう。

まず男子について出身地域別に親の階層をみると、地方よりもソウル出身者の階層が際立って高いことがわかる。親の職業が専門・管理職、両親の学歴が高等教育、経済階層上位の割合をソウル出身と地方出身とで比較してみると、15-30ポイントの大きな開きをもってソウル出身者の階層が高い。女子でも親の学歴、経済階層で出身地域による有意な階層差がみられるが、明らかに男子ほどの差はない。同様のクロス分析を一流大学以外の進学者を対象に行なってみると、この場合には出身地域による階層の有意な違いがほとんど現れなかった（表省略）。

さらに、男子の一流大学進学者には地方出身者の割合が多いという特徴がある。一流大学における女子の地方出身の割合は26.3%（全体では20.3%）であるのに対して、男子の場合は46.3%（全体で28.4%）となっており、地方出身の男子が一流大学に進学する機会が地方出身の女子に比べてきわめて高いのである。

このように出身地域の階層差が一流大学ではみられ、その他の大学ではみられないということ、そして階層の低い地方出身者が一流大学に多く進学することは、地方出身者が一流大学に進学するには階層よりもメリット＝成績の影響が強いことをうかがわせる。

B 出身地域別一流大学進学の実性要因の影響

そこで、出身地域別に階層の進学規定力を詳しくみてみると、地方出身の男子学生は階層の影響をほとんど受けないことが確認できる。次の表9でみるように¹⁶⁾、女子の一流大学進学はソウル出身か地方出身かに関係なく親の職業、学歴という階層要因の強い影響を受けている¹⁷⁾。他方、男子ではソウル出身者の場合には、階層要因の影響が5%未満の有意な水準でみられるのに対して、地方出身者の場合、階層の影響力はまったく現われない。すなわち、ソウル出身男子の場合、父親の職業が専門・管理職であり、両親の学歴が高学歴であることが一流大学進学に有意な影響を及ぼしているのに対して、地方出身男子の場合はこれら階層要因の影響がまったくみられないのである。

以上の結果から、地方出身男子の一流大学への進学機会には、親の経済・文化的階層の影響がほとんど作用しないことがわかった。この知見を階層の影響を受けない地方出身の男子が一流大学に多く進学するという先の分析結果と考え合わせると、地方の優秀な男子の人材は出身階層と関係なく、一流大学に進学できると推測できるのである。

韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造

表 9 出身地域別一流大学進学を規定する階層要因分析

(女子)

	ソウル出身			地方出身		
	B	S.E.	カイ二乗	B	S.E.	カイ二乗
専門・管理職	.6020**	.1918	10.002**	1.1527*	.5126	5.656*
高等教育(父親)	1.1887**	.1963	38.183**	1.1527*	.4896	6.079*
高等教育(母親)	1.1338**	.2199	28.773**	1.8725**	.7678	8.907**
経済階層上位	.4092	.2508	2.720	1.1194	1.0719	1.431

(男子)

	ソウル出身			地方出身		
	B	S.E.	カイ二乗	B	S.E.	カイ二乗
専門・管理職	.7353**	.2937	6.281**	-.2373	.41738	0.251
高等教育(父親)	.8725**	.3012	8.387**	.1772	.5508	0.104
高等教育(母親)	.6834	.3627	3.396**	.0673	.6425	0.011
経済階層上位	.4555	.4144	1.157	-.5819	.7933	0.545

*は $P<0.05$ 水準で有意, **は $P<0.01$ 水準で有意。

注:それぞれの自由度は1である。

これらの結果は、すでに短大や大学といった高等教育教育機関に進学している学生を対象として得られたものであるため、全体としてみた教育機会にメリトクラティックな基準のみが影響していると結論づけるのは早計であろう。しかし、少なくとも男子の一流大学進学においては階層の影響がみられないことから、男子の一流大学進学機会はメリトクラティックであるといえる。

考察にあたり、〈仮説3〉は「大学タイプやランク別進学機会への階層影響力は男子より女子において強く現われる」というものであった。以上の知見からいえば、この仮説を検証したとこにとどまらず、男子の地方出身者の一流大学への進学メカニズムから、韓国におけるメリトクラシー社会の一面を確認したことになる。

7. 考 察

以上の分析から、韓国における大学進学機会には依然として階層不平等が存在していることがわかった。高等教育の拡大に伴って高学歴取得者の割合は全般的にどの階層でも増えていることは確かであろう。しかし、本論文の分析結果からもわかるように、教育機会が著しく拡大したにもかかわらず、教育機会の平等化はそれほど大きく進まなかったといえるのである。しかも男女合わせてみた場合、大学進学はもちろん一流大学への進学機会には階層差があり、上層階層の子弟ほど有利であることが確認された。一般に業績主義の原理によってだれにでも開かれていると信じられている高

等教育に、実は階層の再生産機能が内在していることは確かであろう。

しかし、大学タイプ別にみた規定要因を大学進学者に限っていえば、階層的に不利であるにもかかわらず、男子の優秀な人材が地方からソウルの一流大学に進学してくるという分析結果が得られた。少なくとも男子においては階層よりもメリット＝能力要因が進学に重要であることを示唆しているのである。

ところで、ブルデューらによれば、パリの学生がどんな階層に属していても地方の学生より高い成績を収めているという形で出身地域による教育機会の差が出るという（ブルデュー & パスロン訳書 1991, 106-107頁）。このようなフランス社会と比較すれば、韓国で得られた本論文の知見は少なくとも男子の一流大学進学機会の面では韓国の教育機会がメリットクラティックであることの証左といえる。

このように男子の有利な大学への進学に出身階層要因の影響力が弱い背景としては次のことが考えられる。まず、韓国では高等教育の大衆化が急激に行なわれた。その結果、男子の高等教育はすでにユニバーサル段階に達したのである。しかも、韓国においては学歴・学校歴が重要な指標になって労働市場が分断されている（イ・ヒョス 1991）。そのため、男子の場合には大学まで行かなければ学歴による経済効果がほとんどないという「大学本位制」⁸⁾が成立しているといえる。したがって、階層の制約を越えて多くの男子が無理をしてでも大学に進学しようとする。そのことが、男子の高等教育進学機会に対する階層の影響をみえにくくしていると考えられるのである。

このことを裏返せば、女子進学機会に階層の影響が強く現われるのは女子の進学率がまだ低いことと、女子にとっての学歴が労働市場で機能する度合いが少ないことにあるのではないだろうか。業績によって取得された学歴であっても、女子の場合は職業地位達成に結びつく手段的価値よりも、結婚を通じての階層の再生産という象徴的価値の面において強調されがちである（天野郁夫 1983）。高学歴女性の就業率が他の学歴の女性に比べて著しく低く、家庭での女性の役割が強調される韓国社会では女性の学歴の象徴的な価値が重要視されているのである（キム・ミラン 1993）。このように、男子の学歴では「地位達成機能」の側面が強いのに対して、女子の場合は「地位表示機能」の側面を強く有しているために、高等教育機会における階層の影響が女子により強く現れると考えられる。

本稿から明らかなように、韓国においては男女間の違いによる差が教育機会と階層をめぐって存在している。このような差がなぜ生じるのか、またそのメカニズムはどのようなものであるかについての十分な研究蓄積があるとはいえない。この意味でもこれまで見過ごされてきた女性への視点は教育機会や階層研究だけではなく、ジェン

韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造

ダー研究の諸側面に多いに光を投げかけるものであるといえよう。

〈注〉

- (1) 「現在の大学教育機会は現実的に平等である」と思う人びとの割合をみると、1980年のソウル大学社会科学研究所の調査（キム・キョンドン 1983）においてはわずか16.3%にすぎなかったのが、1987年の韓国教育開発院調査では47.1%と、高等教育機会に対する認識がメリトクラシー価値観へと変化していることが読みとれる。
- (2) ここでの階級分類は、中上階級：高位専門職・管理職，新中産階級：一般専門職，一般専門技術職，事務職従事者，旧中間階級：自営商人，自営技能一，自営サービス業者，勤労階級：下位販売職，サービス職，生産・技能職従事者，都市下流階級：日雇い，露店商人，家政婦，家内単純労働者，となっている。
- (3) 1993年の調査においても，男の子に対して大学院以上の教育を望む割合は21.9%であるのに対して，女の子に対しては14.6%と教育期待水準における男女差がみえる（韓国の社会指標 1993）。
- (4) 韓国の大学入試制度は1995年度から大学修学能力試験，高校内申，大学別本審査という3つの組み合わせによって評価されるものである。大学修学能力試験は1993年度からであり，大学本審査は実施する大学と大学修学能力試験と高校内申のみで選考する大学など，大学によってさまざまである。また日本のように偏差値による大学序列化はまったく行なわれていない。そのため，この調査での大学ランクは1995年度の大学修学能力試験による各大学の合格ラインによってサンプリングしたものである（『1995全国大学入試総覧』入試情報センター）。大学ランク5は155点以上，ランク4の大学は150点，ランク3の大学は140-145点，ランク2の大学は135点以下である。毎年異なる合格ライン点以上に，受験科目や受験時期が異なる専門大学はもちろん，一流か，そうではないかといった学校歴の評価が日本よりもはっき

付表 大学ランク別自大学評価

(% (人数))

	高い ←			→ 低い			計
大学5	13.4	66.0	17.6	2.7	0.4		100 (262)
大学4	7.6	79.6	10.9	1.4	0.5		100 (211)
大学3	4.3	58.1	31.2	6.5	—		100 (93)
大学2	0.8	4.6	62.6	26.9	5.0		100 (238)
専門大学1	—	16.7	45.7	28.5	9.1		100 (186)

$\chi^2 = 601.508$, ($P < 0.01$) 水準で有意である。

「あなたの通っている大学の水準はどの程度だと思いますか」という質問に対する回答率。

- りしていることは、付表の調査対象者の大学評価からも読みとることができる。
- (5) 2年制の専門大学の場合は女子(93.6%)、男子(89.2%)ともに自宅通学率が圧倒的に多いので、一流大学とそれ以外の大学の出身地域別階層を比較した。
- (6) 親の職業や学歴といった階層変数間の相関が非常に高い。例えば、親の学歴と職業との相関は地方では.5902、ソウルでは.5775であり、父親と母親の学歴相関はソウルで.7793、地方で.8297である。そのため、表7のように複数の変数を導入したロジスティック分析を行なうと、多重共線性によってモデルの適合性に問題が生じるのである。このような理由から、それぞれの階層要因の影響をみるため、ここでは一変数のみのロジスティック回帰分析の結果を示した。
- (7) それぞれの階層変数が加えられる場合、偏回帰係数(B)から算出するオッズ比の増加率からも、男女別階層による影響の違いをみることができる。例えば、父親の学歴が高等教育卒であるとソウル出身女子の一流大学進学のおッズ比は3.2828倍増加するのに、ソウル出身男子の場合は2.3928倍の増加にとどまる。すなわち、同じソウル出身であっても、一流大学進学に対する出身階層の影響は男子よりも女子において強く現われるのである。
- (8) 矢野(1991)は、教育収益率の分析から、男子の場合に「高校に進学してしまえば、大学まで走らないと経済的意味がない」とし、これを「大学本位制」と呼んでいる。

〈参考文献〉

- 天野郁夫 1893,「学歴の地位表示機能について」『教育社会研究』第38集, 44-49頁。
- 天野正子 1986,「戦後期・大衆化と女子教育」『女子高等教育の座標』垣内出版, 59-92頁。
- Bourdieu, Pierre, J・C.Passeron 1970, 宮島喬訳『再生産』藤原書店, 1991。
- Brinton, Mary C 1993, *Women and the Economic Miracle-Gender and Work in Postwar Japan*, Universty of California Press.
- チョン・テス 1993,『7.30教育改革』ソウルエジ社。
- チェ・ヨンピョ 1989,『高学歴化現象の診断と対策』ソウル韓国教育開発院。
- ハン・マンギル 1991,「大学教育機会の拡大による大学の分化と教育機会の不平等に関する研究」『教育学研究』第29巻3号, 教育研究所, 251-266頁。
- 藤田英典 1979,「社会的地位形成過程における教育の役割」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会。

韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造

- イ・ヒョス 1991,『高学歴化現象と雇用』韓国労働研究院。
- イ・ミナ, ペ・ゾングン 1991,『韓国教育の実体』ソウル教育科学社。
- 尾島史章 1990,「教育機会の趨勢分析」菊池城司編『現代日本の階層構造 3—教育と社会移動—』東京大学出版会。
- 韓国教育開発院 1994,『韓国の教育指標』ソウル韓国教育開発院。
- 韓国教育開発院 1987,『韓国人の教育観分析』ソウル韓国教育開発院。
- 韓国教育開発院 1993,『韓国人の教育熱研究』ソウル韓国教育開発院。
- 韓国統計庁 1971,『韓国文教統計年報』。
- 韓国統計庁 1993,『韓国の社会指標』。
- 韓国統計庁 1996,『韓国経済活動人口年報』。
- カン・ムソップ 1990,『韓国の高等教育政策』ソウル教学社。
- カン・スノォン 1990,『韓国教育の政治経済学』ソウルハンギル社。
- 1994,「1990年代の相対的過剰教育の一般的趨勢とその政治経済的帰結」梨花女子大学教育社会学研究会編『韓国教育 2』ソウルハヌルアカデミ, 238-260頁。
- 荻谷剛彦 1995,『大衆教育社会のゆくえ』中央公論社。
- キム・ブテ 1995,『韓国の学歴社会論』ソウルネイルルヨヌン冊。
- キム・キョンドン 1983,『経済成長と社会変動』ソウルハヌルアカデミ。
- キム・ミラン 1993,「韓国における女子高等教育の拡大と文化—女性にとっての学歴と良妻賢母—」『東京大学教育学部紀要』第33巻, 55-66 頁。
- キム・ソノップ 1993,「ネットワークと縁故主義」イム・ヒソップ・パク・キルソン共編『今日の韓国社会』ソウル図書出版ナナム, 169-190頁。
- キム・ヨンファ 1990,「高等教育拡大の結果：高等教育機会獲得に及ぼす出身階層の影響趨勢(1967-1984)」『教育学研究』第28巻 3 号, 教育研究所編, 65-81 頁。
- 1992,「親の教育熱：社会階層間比較を中心に」『教育学研究』第30巻 4 号, 教育研究所編, 173-197頁。
- キム・ヨンスク 1990,『点数病学校・学歴病社会：このままでいいのか』ソウル図書出版星苑社。
- 直井優 1987,「現代日本の階層構造の変化と教育」『教育社会学研究』第42集, 24-37 頁。
- ソン・ヨンギョン 1993,「韓国大学研究の動向」キム・インホェ他,『韓国教育の歴史と文化の再照明』ソウル学志社, 221-237頁。
- 矢野真和 1991,『試験の時代の終焉—選抜社会から育成社会へ—』有信堂。

ABSTRACT

Meritocracy Structure in Opportunities of Higher Education in South-Korea : Admission Opportunities of Both Genders to Each Type of Colleges and Universities

KIM Mee-Ran

(Graduate School, The University of Tokyo)

7-3-1, Hongo, Bunkyo-Ku, Tokyo, 113-0033. Japan

This paper analysis the structure of educational opportunities in South-Korea, which like Japan has strong tradition of Confucianism and is famous for intense competition for admission to colleges and universities. In line with analysis of inquiry to college and university students in Seoul, it investigates how inequality in educational opportunities remains in South-Korean society in which the equal opportunities seem to be growing.

The Main findings are as follows: 1) in spite of popularization of higher education, there still remains inequality in educational opportunities due to social class of a student portrayed by job and educational background of his/her parents; and 2) the social class affects admission opportunities for college and university types ranked by the student's individual abilities in accordance with their school performance, that is, by merit. It is confirmed that inheritance of a mechanism reproducing the social class exists in the system of higher education of which opportunities are thought to be offered to everybody based on the meritocratic principle. However, 3) the knowledge is gained that a factor of merit—that is, one's ability rather than that of the social class—dominates admission of male students to top universities in accordance with a mechanism that excellent male students from local towns and villages can enter top universities even though they belong to lower classes. Therefore, the result that a factor of the social class has strong effect on educational opportunities for female students is acquired.

In spite of the fact that differences in educational opportunities and their correlation with the social class emerge from discrepancy between the two genders, mechanisms how and why the differences that come out have been hardly studied. Therefore, the kind of previously overlooked viewpoint on female students considered in this paper may shed light on various aspects of gender studies in addition to studies of educational opportunities and social class.